ヨコトリーツ!

横浜トリエンナーレサポーター Hama-Treats! フリーペーパー　Yoko-Treats!

VOL.11
JAN. 2015

チーム活動に携わったみなさん、
ヨコトリ2014って どうでしたか?

『ヨコトリーツ!(Yoko-Treats!)』は、「横浜トリエンナーレ」を応援し一緒に盛り上げる活動を行うサポーター"ハマトリーツ!"による手作りのフリーペーパーです。「トリーツ/Treats」には、「思わぬ喜び、とてもいいもの」という意味があります。横浜のいいもの、楽しいものをお伝えしたい!ということで名付けました。ハロウィンの決まり文句 "Trick or Treat!"(「トリック オア トリート!」=お菓子をくれなきゃイタズラするぞ!)から連想して、みんながワクワクするような情報交換の場を目指しています。

ヨコハマトリエンナーレ2014 公式カタログ

横浜美術館ミュージアムショップで好評販売中!

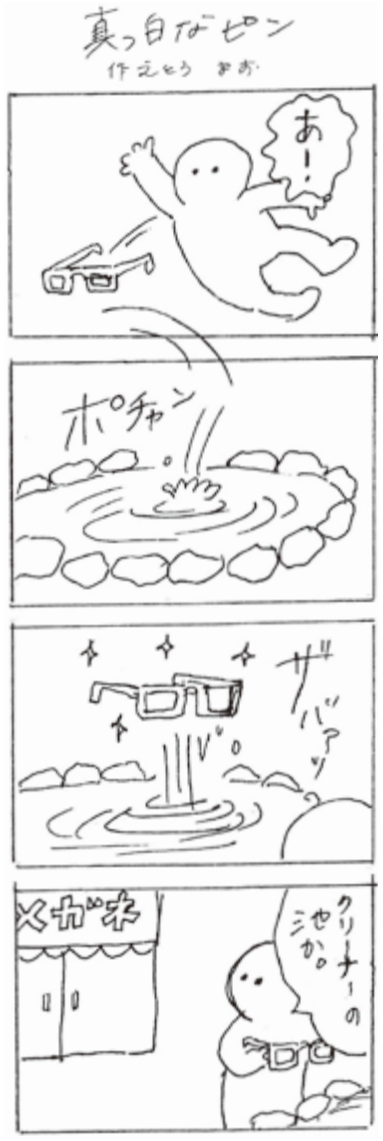
ヨコハマトリエンナーレ2014「華氏451の芸術:世界の中心には忘却の海がある」
㈱平凡社発行 2,800円(税別)
B5判変形 368ページ

横浜美術館ミュージアムショップ
【営業時間】10:00-18:00

「忘却」「海」「芸術」「中心」の4種類! おもてなしマップ、絶賛配布中!

みなとみらい21地区に遊びにきた方々に横浜の魅力を伝えるべく、横浜トリエンナーレサポーター"ハマトリーツ!"のおすすめ情報をつめこんだ「おもてなしマップ」。テーマは4つ。横浜の歴史に思いを馳せる「忘却」、横浜の海と水場を紹介する「海」、横浜のパブリックアートや文化芸術施設を紹介する「芸術」、そして横浜発祥のものや店を集めて紹介する「中心」です。AR技術を用いてお手元のスマートフォン、タブレットと連動させれば、さらに深いトリビアも楽しめます。お好きなテーマのおもてなしマップを片手に横浜を歩いてみませんか?

横浜美術館、黄金町エリアマネジメントセンターほか横浜各所にて無料配布中!



江藤真央　http://maoeto.tumblr.com

横浜トリエンナーレ サポーター Hama-Treats! フリーペーパー「ヨコトリーツ!」VOL.11 ●企画・編集: 横浜トリエンナーレサポーター ハマトリーツ! フリペチーム(青木邦彦/入江暢子/上田良寛/江藤真央/大島由理香/斉藤照子/林いづみ/林田将来/深野一穂/山田崇之) ●カバーアート: 佐橋裕樹 ●紙面デザイン: 山田崇之/大島由理香 ●発行日2015年1月30日 ●発行元・お問合せ: 横浜トリエンナーレサポーター事務局[横浜市中区日ノ出町2-158 黄金町エリアマネジメントセンター内 | TEL: 045-325-8654] ●横浜トリエンナーレ サポーター 公式WEBサイト　http://www.yokotorisup.com

次号発行日はハマトリーツ! ウェブサイトでお知らせします http://www.yokotorisup.com

ヨコハマトリエンナーレ 2014 サポーター活動報告
シンポジウム「協働の地平」

2014 年 12 月 21 日 (日)、ヨコハマトリエンナーレ 2014 サポーター活動報告シンポジウム『協働の地平』が開催された。午前中は、横浜トリエンナーレサポーター事務局長山野真悟氏による活動報告、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合プロデューサー・NPO 法人 BEPPU PROJECT 代表理事山出淳也氏による基調講演が行われた。午後は、市民と主催者の協働に関して、主催者側の視点、市民の自主的な活動としての視点、そしてそれらの総括と 3 つのパネルディスカッションが組まれた。特に印象に残ったプログラムを報告する。

基調講演

BEPPU PROJECT は、誰から依頼されたわけでもなく、山出氏自身が「別府のまちがアートでどう変わるのかを見てみたい」、そんな思いから始まりました。山出氏の主な役割は作品を作ることではなく、人と人、アーティストとまちや市民とをつなぐこと。アーティストが別府のまちを見て市民とふれあい、何を作りたいと思うのか。それぞれの悩みを互いに話し合いどう解決していくのか。横浜トリエンナーレとはまた違ったアートと地域の関係性が示され、興味深いものでした。氏が手がけた国東半島芸術祭は、アクセスの悪さから陸の孤島とも称される地だからこそ残る特異な文化や自然、歴史とアートが出会うことで生まれた数々の作品を、「歩く」(時には「登る」)ことで楽しんでいくスタイル。都市型のアートイベントに慣らされていた自分にとってはとても新鮮でした。別府、国東半島、是非行ってみたい場所となりました。(青木)

伊藤達矢氏講演と パネルディスカッションラウンド 1

はじめにパネリストの一人である東京藝術大学特任助教の伊藤達矢氏の講演がありました。東京都美術館ではリニューアルを機にミッションを見直し、アートを見せるだけでなく、「対話のある社会」に貢献する位置付けを加えたそうです。そこで始めたのが対話の媒介になるとびらプロジェクト。参加者の自主性を尊重し、新しい企画を始める際には「この指とまれ」で小さく始めること、リーダーを決めず全員がフラットであることなどが話されました。ヨコトリとは異なるこのような協働の枠組みは、その後のディスカッションでの主な論点となりました。(上田)

パネルディスカッションラウンド 2 と総括

ラウンド 2 では「市民活動の広がりと自主性」というテーマで、ハマトリーツ!チーム活動の各リーダーらが、活動の良かった点や反省点などを挙げながら活発な意見を交わしました。いずれも、様々な悩みを抱えながらも、満足度や達成感は高く、今後の活動への意欲あふれる発言が相次ぎました。最後の総括ディスカッションでは、今後の活動への展望について話し合われ、パネリストからは、活動の社会的価値の重要性や、「文化芸術創造都市・横浜」への施策の一環としての市民活動に期待する意見も出ました。

今回のシンポジウムは、参加者が今後の活動について、反省点を生かしつつ、より主体的に取り組んでいくという大きな方向性を共有できました。会場で紹介された森村 AD のメッセージに " 楽しむ精神 " という言葉がありましたが、その先の「社会でのアートの役割」や「市民協働」という、より幅広い視点も持ちながら活動することも、大切な要素になってくると感じました。(林田)

山出淳也氏

伊藤達矢氏

Photo：KATO Ken

チーム活動に携わったみなさん、ヨコトリ2014ってどうでしたか?

2013年6月から、ヨコトリ2014を当面の目標として活動をスタートしたハマトリーツ！のチーム活動。ヨコトリ2014が終わったいま、各チームを引っ張ってきたみなさんに、これまでの活動を振り返っていただき、そしてこれから次のヨコトリに向けて、展望してもらいました。

一から始めたからこそ生まれた、アットホームなチームの雰囲気が一番の成果

こどもアートチーム
リーダー:伊神花織

年齢・性別・職業もさまざま、子どもが好き・子どもにアートに親しんでもらいたいなどの思いで集まったメンバーたち。もちろん、ワークショップやイベントをしたことのない人がほとんど。何から考えればいいか、何を行うべきなのか、手探り状態でのスタートでした。

でも、それが逆に良かったと後になってからは思います。ミーティングの進め方や、ワークショップのアイディアを、それぞれ自分なりの考えで意見でき、寛容なチームになったからです。各々が得意不得意なこと、時間の問題をカバーしあいながら、みんなが新しいことに挑戦することに、前向きに取組めた。それが一番の成果なのではと思っています。

もちろんワークショップもたくさんの改善の末に、お客さんにも喜んでいただける内容でできたと思います。

でもきっと、さらにちがう手法でのワークショップやイベント企画も可能だと、このチームの雰囲気が言っています。また、新たなメンバーや、他のチームなどとのコラボレーションによる、可能性も広がると感じます。

普段と違うコミュニティで、新たな人とつながったり、今までにない活動を行ったりすることを一緒に楽しめる、そんな機会に改めて感謝します。

Let's get on board

企画・イベントチーム
リーダー:久地岡聡志

いまノリに乗っているテニスの錦織圭は小学生の卒業文集に、将来は世界チャンピオンになると書いていたそうだ。本田圭佑やイチロー、石川遼らアスリート達も幼い頃にすでに将来の姿を描いていたという。

自分は何と書いていたかを思い返してみると「海の冒険者」となんとも稚拙なことを書いたものである。現実味がまるでない。と恥ずかしいやら、そんなことを書いたことも遥か忘却の彼方にあったのだが…。

イベント・企画チームの面々とさまざまなサロンや水戸芸、あいトリふぁんとの交流、ハマトリーツ！みんなを巻き込んでのカウントダウンイベントなどetc…

振り返る間もなく次のことへ向かうので忙しなく、チームとして機能していたかというと疑問は残る。ただ「忘却の海」の冒険は忙しい航海であったが辿り着いた場所は素敵なところだった。

気付けば「忘却の海」の冒険者に。幼き夢は実現していた(なんと言霊の恐ろしさよ)。

さて、ここからハマトリーツ!は新たな旅路へと向かう。みんなでもっと素敵な世界をみてみたい。

長い航海に向けて旅立つには、今回の航海よりも充分な準備が必要になる。

馬鹿げた衝動がそのエンジンになると信じ、また懲りずに新たな企みを。

冒険の旅に終りは無い。

ここから、大海原へ

LOGBOOKチーム
リーダー:横井貴子

LOGBOOKとは、まちを海に見立てて、その海を航海した「Ｌｏｇｂｏｏｋ：航海日誌」を作り、誰かと交換して遊ぶアートプロジェクトです。演出家の市原幹也氏と、演劇制作者／ドラマトゥルクの野村政之氏が考案し、全国各地で展開されています。

そんなアーティストの作品を、サポーターだけで企画・運営するという初めての取り組みで、初めのうちは作品を壊さないように継承することに努めました。とはいえ、ワークショップで使用する「Ｌｏｇｂｏｏｋ：航海日誌」の作品づくりから、お客様に楽しんでいただくためのファシリテートまで、ＬＯＧＢＯＯＫの要素は幅広く、試行錯誤しながらの取り組みでした。

結果として、多くのお客様に楽しんでもらうことができ、展覧会だけでない横浜の多様な魅力をお伝えできたと思います。そんな体験を支えたチームメンバーの皆には、本当にあらゆる場面で助けられました。互いを尊重し、明るく和気あいあいとした、いいチームが誕生したと思います。

これからも、横浜でのＬＯＧＢＯＯＫは続いていきます。どこかの誰かの記憶に出会う船。ＬＯＧＢＯＯＫチームの航海が、これからどんな景色を見せてくれるのか楽しみです。

ハマトリーツ!の〈航海日誌〉

フリペチーム
リーダー：山田崇之

ヨコトリ２０１４という目標は見えても海図のない波間を漕ぎ進み、会期終了まで予想以上のうねりをいくつも超えてきたハマトリーツ!。その当事者として自らの目で見て、仲間と熱く議論し、言葉にして紙に焼き付けた「ヨコトリーツ!」は、一年半にわたって〈忘却の海〉を旅した者の〈航海日誌〉だったのだと、いま1号～10号を並べてみて気づきました。

「Moe Nai Ko To Ba」は焼かれ、納められたフレーズはMoe Nai演劇部の記憶に留められたけれど、〈ファイアマン〉が再び現れてヨコトリ２０１４関連書物を全て焼くならば、私にとって忘却し得ないのは、このフリーペーパー10号分。観覧者視点でなく、祭りをカタチにしようとする能動的な市民の視点で、その苦悩も楽しみも綴られた、ヨコトリ２０１４のもうひとつの記録です。

ハマトリーツ!が続く限り「ヨコトリーツ!」は発行され続けるのかな? このご時世、紙メディア以外の広報手段もさまざま考えられますが、有志の誰もが参加できる低い敷居の場を作るなら当面は紙メディアが相応しいような気がしますし、活動の〈航海日誌〉的な存在感は、やっぱり紙でなきゃ醸し出せないでしょうねぇ。

ヨコトリ2014をふりかえって

おもてなしプロジェクト
リーダー:北野弘二

おもてなしマップ作りの中で、たとえば載せる写真ひとつ撮るのにも、いついつ撮影と予定を決めてもたったその一日天候に恵まれなければそれだけで1週間作業ストップとか、それぞれ普段は仕事をしながらの活動にはなかなかタフな場面がたくさんありました。

さらに本展の会期が進むにつれ様々なイベントも盛り上がってくるので、同時に色々なことに関わって、3年に1度というお祭り感の中であっという間に過ぎる時間に常に追われるのが、大変だったことの一つでした。

そういったなかで得たことは経験というよりはまだ課題に近いものですが、おもてなしプロジェクトは継続中なので、これからの活動にどういかせるのか楽しみなところでもあります。

おもてなしはチームではなく各チームの有志によるプロジェクトなので、関わり方の頻度も様々、出入りもわりと自由な状況の中で、もてなされた側がもてなす側にまわったり、その経験を交換し合ったりしながら、もてなし上手なひとが横浜にだんだん増えていったら面白いかなあとか考えながら、目下、3月8日(日曜日)のまちあるきのイベントを企画中です。横浜を楽しむというところからまた一歩、始めてみたいと思います。お楽しみに！

ハマトリーツ!の魅力を伝えるデザインを目指して

デザインチーム
山田崇之

ロゴデザインに始まるビジュアル・アイデンティティ展開、フライヤーづくり、イベント会場づくりなど、ハマトリーツ!をもっと魅力的に「アピールする」仕掛けをカタチにするのがデザインチームの役割でした。いささか専門的で、結果的にチームとして機能していたかと言われると「?」ですが、対外的な成果はそれなりにあげたように思います。

とくに印象的だったのは、風船でMARK ISみなとみらいのグランドガレリアを埋め尽くした200日前カウントダウンイベントの会場設計と、ヨコトリ2014本展会場でハマトリーツ!の皆さんにお揃いで着用していただいた波パターン柄のオフィシャルTシャツ。いずれも強いインパクトでハマトリーツ!を視覚的にアピールできたと思うし、またハマトリーツ!の皆さんも、これに参加することへの誇りを感じられたり、仲間意識を感じられる一助になれたと思います。

ヨコトリ2014が終わり、次の目標は遠く3年後。ハマトリーツ!の自体の魅力をあらためて訴求しないといけない時です。そのためには活動内容の充実がもちろん重要ですが、同時にその価値をイメージで訴求する手法は、ひきつづき有用だと考えています。

森村泰昌氏から、激励のメッセージ！

昨年12月21日に開かれたシンポジウム「協働の地平」の最後にサプライズで紹介された、ヨコハマトリエンナーレ２０１４アーティスティック・ディレクター森村泰昌氏からサポーターへの手紙、ここに全文を掲載します。

サポーターの皆様、ヨコトリ２０１４、ほんとうにお疲れさまでした。今でも、皆さんの顔、顔、顔が目に浮かびます。

サポーターというのは、無償の行為です。なにも権限を持つ事ができないんです。

だから、「それは出来ない、やっちゃダメ、おもしろいけど実現は難しい」などと言われ、なかなか思うようにいかないことも、多々あったはず。

しかし、給料もらって、その代わりに様々な権限を持つ立場の人には、それはそれで厳しいカセがあって、身動き出来ないというしんどさがあるのだとも思います。サポーターはそこをカヴァーできるのではと思うのです。サポーターにはなんの権限もないけれど、そのぶん、なんでもやれるという自由度がある。「それは出来ない、やっちゃダメ」という上から目線を、その自由な立場から突き崩す。そういうことをトンチを働かせて、楽しくやっていく。私はそういうサポーター像を勝手に思い描くのですが、単なる理想論でしょうか。

サポーターって、単なる隙間家具ではない。重要な任務を担っている……なんていうと気分が重くなりますね。だから、基本は楽しむ精神であるということは強調してもしすぎるということはないと思います。問題は、このようなサポーターの自由な立場からの参加を、ヨコトリ本体が大きな気持ちで知って知らないふりして容認し、でも裏ではしっかり応援する。そういうことができるかどうかという点です。「未公認」「非公式」「草の根」的な活動と、いかに連携できるか、これ大切なポイントです。しかし、残念ながらここが杓子定規になってしまって、なにかが止まってしまう。

私は、サポーターの皆さんの活動はどれもこれもおもしろくて、なんの問題もないと思っている。どんどん新しいことにチャレンジしてほしい。変えなければいけないのは、それを受け入れるヨコトリ本体の姿勢です。次回のヨコトリでは、ぜひ、皆さんの誠意と愛で、ここを突破してほしい。なかなか難しいけれど、サポーターがうまく絡めば、きっとヨコトリはもっと多くの人々に広がっていくはず。そう信じています。

最後に、皆さん、長きに渡りありがとうございました。もう一度御礼申しあげます。

森村泰昌より